

## イタリア「人民の家」・グラムシ「陣地戦」について

[http://www.ne.jp/asahi/institute/association/old/older\\_200610/index.htm](http://www.ne.jp/asahi/institute/association/old/older_200610/index.htm)

地域・アソシエーション研究所 2003 All Rights Reserved.

イタリア「人民の家」・グラムシ「陣地戦」について

松田博(立命館大学教授)

聞き手:地域・アソシエーション研究所

この報告は、2002年11月15日に、立命館大学の松田博教授の研究室を訪ねていて、「人民の家」とグラムシについて2時間以上にわたってお話していただいたものをまとめたものです。今後、地域で活動していく上で、非常に参考になるお話をさせていただきました。また、参加者一同、ぜひイタリアに実際に視察に行きたいというのが感想で、地域・アソシエーション研究所としてもぜひ、「人民の家」視察ツアーを企画したいと思っています。

なお、4人で押しかけ、各自思うままに質問したり、意見を述べたりしましたが、「質問」として一括しました。

-----  
-----

(質問)「人民の家」はイタリアでどのくらいの数あるのですか。

(松田) その地域ごとの記録をきちんと残すということで、フィレンツェはトスカーナ州の州都ですけれども、かなり熱心にトスカーナ州の社会教育セクションが、資金を出しまして、研究者とプロジェクトチームを作って、聞き取り調査をやっているんです。その調査に参加させていただきました。フィレンツェ県だけで200近くあります。エミリア・ロマーニャ州のボローニャ県で100近くあります。しかし、全国的にいくつあるのですかと聞かれるのですが、イタリアの人に聞いても、実際あまり統計は取れていなくて、「人民の家」を名乗っているところだけで、おそらく2000ヵ所くらいだろうと。「人民の家」を名乗らない、その地域独特の名前でやっているところを入れると、おそらく数千から1万ヵ所。自治体の数が約8200ですから、ペルージアやボローニャのように多い自治体もあるし、小さいところでも1~2ヵ所ありますし、少なく見積もっても1万は越えるだろうと。

## イタリア「人民の家」・グラムシ「陣地戦」について

(質問)1グループの単位の会員数は何人くらいですか。

(松田)これもよく聞かれるんですが、極めて巨大なところ、数千人という会員数をもっているところから、田舎の小さな数十人くらいの、サークル的なものまでいろいろあります。フィレンツェで、比較的大きなところで会員数 2000 人くらい。こういところは自治体と協力してレストランとかサッカー場だとか、学童保育、お年寄りのための様々なこと、外国人労働者のための語学教室などいろいろやっている。むしろ地域のカルチャーセンターになっている。それからプールや劇場、映画館。イタリアはサッカー好きだからね。

(質問)19 世紀からということですがけれども、特にイタリアで広まった理由は？

(松田)イタリアだけじゃないんですよ。もともと第一インターナショナルで広がり、フランスでもベルギー、ドイツでも、「人民の家」的なものはあった。例えば労働者、市民のサークルとして。かなり大きな建物をもったものもあった。19 世紀半ばは、イタリアだけではないんですよ。ただ、それがいろんな条件の中で消えていった。イタリアのように市民が自発的なところで発展していった。フランスはフランス革命以降、逆にジャコバンは集権国家を作るために、自発的な結社は法的に禁止しますからね。抵抗運動として、地下に潜って小さな友愛結社として残ってはいるんですが。それからドイツの場合はやはりどっちかという、政治優先ということで、「人民の家」の組織自体が社会民主党の支部になっていって、イタリアのように「人民の家」が母体となって、そこから労働者政党や協同組合、いろんな市民運動が生まれてくる、しかし「人民の家」が残るといった構造ではないんですよ。どこでも人民の家が母体になるんだけど、「人民の家」が産後の肥立ちが悪くて母体自体が衰弱していく。

イタリアで禁止されるのは、ファシズムになってからです。「人民の家」を弾圧し、逆に彼らが「ファッショの家」みたいにしてファシズムの大衆基盤にしようとする。面白いのは、民衆がファシズムに動員されるのであれば、その中に入って、ファシズムの中の反対派を作れということをやする。そこもきわめてイタリア的発想だと思うんですけどね。日本なら転向だとか言われるんでしょうが、民衆がそうなるのであればその中に入ってやるのが当然だということ。それで逆にファシズムの方が困ったという記録があります。

イタリアにおいても南部と中部と北部では全然「人民の家」のあり方が違います。画一的に、これがモデルだというふうには言えないんです。一つのパターンがないんですよ。スローフード運動というのは、トリノ近郊の村の「人民の家」が発祥の地なんですけど、他所に行きますと、いや、あれはどこでもやっていたんだと言ってるんですよ。あれはトリノという工業化された大都市の近郊でやったんでマスコミも取り上げた。あれが一挙に有名になったのは、ニュース 23 で筑紫哲也さんが取り上げてからです。一種のカルチャーショックを受けたんです。農民たちが、ただの反対じゃなくて、代案も出している。要するに、食生活から見直そうということで、単に農民がトマトを投げつけたりワインをぶつけたりという過激な面だけじゃなくて、ちゃんとオル

## イタリア「人民の家」・グラムシ「陣地戦」について

ターナティブを提起してきているという、そこが大事だと思うんです。それで、どちらを選ぶかは市民が決める。別にファストフードに敵対するものではない。

(質問) スローフードが出てくるとき、思想的な背景としてはイタリアのマルクス主義の中に、もともとそういう素地があったのですか。

(松田) スローフードのリーダーの一人が言っているのは、グラムシの影響が大きいと言っています。グラムシは『アメリカニズムとフォーディズム』の中で、アメリカのトレードマークの付かない生活様式を作らなければいけないと言っている。これは当時のコミンテルン批判ですね。「どうせ資本主義は潰れるんだから、すぐ革命しようぜ」ということではなくて、アメリカのヘゲモニーは生活様式レベル、大衆レベルにまで浸透しているわけだから、それとはまったく質的に違う生活様式を作ることが、ヘゲモニー闘争になるんだということです。

つまりポストフォーディズムの問題ですね。ポストフォーディズムというのは、経済システムだけじゃない、もちろん経済システムは大事なんだけど、生活様式、そこまで降りるわけです。大量生産、大量消費で、その結果がファストフードになるわけですから。

「人民の家」をやっている人たちは、いろんな運動を見てインタビューしていると、結構若い時にグラムシを読んでいるんです。グラムシの陣地戦を、どう現代的にヘゲモニー闘争として適用していくかですね。これはイデオロギーではないんです。イデオロギーでは上で空中戦やるでしょう。ヘゲモニーというのは日常的に自分がどう生きるかというところから出てくるわけです。自分の生活様式そのものから組み換えていくとか、自分の人間関係とかを見直していくというところから始める。単にアメリカニズム批判をやっても、そこからは何も出てこないわけですから、やっぱりオルターナティブを提示していく。陣地戦というのは、グラムシはオルターナティブという意味で使っているわけですからね。単に既存の体制を批判するだけでは創造的なものは出来てこないわけですから、そういう思考能力や行動能力をどう作っていくか、ということが陣地戦のいちばん大切なところなんです。

従来の、これは日本だけではないんでしょうが、非常に既成左翼型のグラムシ理解で、政党中心だと理解されてきた。これはグラムシではなくてトリアッティなんですよ。構造改革論を正当化するために、グラムシはそう言ったんだと言われてきたけど、でも全然違うんですよ。グラムシは政党もアソシエーションの一部なんだと言ってるんです。政党だけが特権的な位置を占めるのじゃなくて、政党もアソシエーションの一部であり、他のアソシエーションとは役割が違うだけでね。それがロシア革命以降、ロシアの革命もどちらかというところだとジャコバン型革命ですから、上からの革命ですから、民衆の自発的結社に対しては否定的ですから、上からの集団化で潰れていくんですからね。

(質問) 学生の時から、普通の学生以上には解放文献を読んでいたつもりなんですが、グラムシがスコンと抜けてるんですよ。

## イタリア「人民の家」・グラムシ「陣地戦」について

(松田) オリジナルノートから翻訳して、田畑さんにはドイツ語だいが協力してもらって、今度書いたやつは皆オリジナルのやつなんです。いままで翻訳されていないものをかなり載せています。今まで日本で出たやつはトリアッティ版なんです。だからすごく歪曲されているんです。都合のいいようにされていて、ほとんど使いものにならない。それが長い間、イタリアでも他の国でも日本でも、グラムシの『獄中ノート』だと信じ込まされてきたんで、どうしても否定的影響があるんです。いまオリジナル版に基づいて、これはかなり時間がかかるんですが、まずグラムシそのものが何を書いているかということを中心にちゃんと翻訳して出していこうということで、田畑さんの協力も得ましてね。アソシエーションについて実に面白いことをいっぱい言ってるんですよ。それが今までのグラムシの旧版とかに全然出てこない。翻訳されていない。オリジナル版とトリアッティ版を比べているんですが、そういう箇所を削っているんです。極めて意図的なんですね。都合の悪い所を文章を丸ごとズボットと抜かしているんですよ。旧版読んでいるとき、時々つながらないところがあるんですよ。それでグラムシが分かりにくいとか難解だとかいろんな言い方をされる。そうではなくて、継ぎはぎにされているんですよ。トリアッティは柔軟な面と非常に教条主義な面と両方持っていますから、第三インター批判まではいいけれど、レーニン批判までいくと随分抜かしています。

(質問) 「人民の家」というのは運動として、行政とか関係なくて、下からの運動として…。

(松田) 自発的。公的なところとはいっさい関係ない。施設を作る場合も無償労働です。公的なものは「住民評議会」。これは自治体を支える住民参加の機関です。「人民の家」があるところは「住民評議会」も活発にできる。「人民の家」は草の根で、「住民評議会」は自治体を支える公的な機関です。これもグラムシが言っているんですが、住民投票の権利ですね。これも今まで紹介されたことがないんですが、住民投票、国民投票の権利は重要なんだと。世界の既成左翼的発想だと、日本もそうなんですが、一方では国民主権だと言いながら、住民投票・国民投票とかとても否定的なんですね。怖いんですね、住民投票されるのが、右も左もね。一旦選ばれたら自分たちの特権を維持したいという政治システム。ヨーロッパでもアメリカのほとんどの州でも住民投票・国民投票というのは大事だっとなっていきますよね。EU の加入問題一つとっても、イタリアの場合、例の原発問題の 87 年の国民投票が大変有名で、89%くらいで原発凍結派が勝利したんですね。もう原発いらぬということ。あれ以降日本でもかなり国民投票について関心もたれていますが。

(質問) 「人民の家」の会員さんは、誰が会員とかはっきりしているんですか。

## イタリア「人民の家」・グラムシ「陣地戦」について

(松田) 地域や歴史によって違う。私が話を聞かせてもらったのは 20 か所くらいです。見て歩いたのはもっと多いですけど、実際にそこの責任者の話を聞いたのは 20 か所くらいです。それは全部違う。私がここ(『ボローニア「人民の家」からの報告』)に書いたのはボローニアのことですけど。ボローニアに 3 か月いたんです。だいたい午前中はお年寄り、年金生活者の人たちが集まる。昼過ぎは主婦層ですわ。お昼の仕度の買物を終わって、お茶も飲めるし、話もできるし、軽食なんか食べられるということで集まってくる。主婦層は夜は子供が帰ってきますから、そんな長い時間はいれなくて、それから後は仕事が終わった勤労者がだいたい 5 時過ぎくらいからです。だいたい早く閉めるところでも 12 時。中には 1 時、2 時。12 時というのは一応営業のたてまえがあって、戸は閉まっているけれど、中ではドンチャン騒ぎになっている。

映画の上映会とかね。映画が好きですからね。だいたい中規模の「人民の家」は映画館ないしシアターを持っていますね。向うは映画が好きですね。黒沢なんて、もうどこへ行っても黒沢映画について日本人はどう思っているのか話してくれてね。僕も映画大好きだから、尽きないわけですよ。映画の話を始めたら、もう留まるところがない。年間で日本人が平均 1.5 回か 1.6 回くらいでしょ。向こうがだいたい、統計によって若干違うんですが、それは、いわゆる興行館の統計と、他にシネクラブがいっぱいあるんですよ。「人民の家」がシネクラブをもっているし、あとは大学がシネクラブをもっているから。映画学科がありますからね、どこの大学にも。ボローニア大学は 800 席の大劇場とか大変立派なものを持っています。それを入れると年間 10 回ではきかないだろうと思います。フィレンツェで聞いたところ、月最低 1~2 回は見ていたと言っていましたけど。僕がイタリアに留学してシネクラブに入るともう安く観れるんです、名作が。黒沢明週間とか、小津安次郎週間とか、日本で観れなかったものが観れるんですよ。だから映画文化はやっぱり底力がありますね。外国の映画で初めてアカデミー賞を取ったのは「ライフ・イズ・ビューティフル」でしょ。

(質問) 日本だとテレビで映画を観たりとかありますよね。そういうことはなくて、広い所で皆が集まって？

(松田) 集まって観るのが好きですね。ワイワイガヤガヤ言いながらワインとか飲みながらね。最近では日本の大型のビデオスクリーンがありますよね、ああいうのを入れているのもありますね。もちろん昔の古い「ニューシネマパラダイス」に出てくるような昔の映画館的な、映写機回してやるというのも古い「人民の家」の場合はありますね。映像というのが民衆娯楽として大変大きな存在としてあるんですね。ムッソリーニは映画が大好きで、ヒトラーはそれを真似したんですが、ラジオと映画を宣伝の道具にしたんですよ。ムッソリーニの長男、ジュリオ・ムッソリーニは映画製作の専門家になったんですよ、パトロンになってね。それを担いでピスコンティやネオリアリズム派が、金だけ出させて反ファシズムの映画を作ったものだから問題になったんですよ。

## イタリア「人民の家」・グラムシ「陣地戦」について

(質問) ベースは地域がベースになっているのですね。労組は労組で別にそういう機能をもった、会館みたいなものはあるのですか。

(松田) イタリアの労働組合の特徴は支部組織が縦と横、産別と地域別に組織されています。イタリアだけではないんですけども、特にイタリアの場合は産別だけではなくて、地域労組が強いんですよ。これは労働会議所で、職業紹介機能と職業訓練機能を持っているんです。だから強いんです。これは必ず「人民の家」のあるところでは「人民の家」の構成団体に入ってます。地域労組の事務所が「人民の家」の中にあるんですよ、そこへ行けばいろんな社会保障の手続きとかしてくれる。イタリアは税金が自己申告ですから、日本みたいに源泉徴収しないですから。

(質問) 「人民の家」で、さっき労組が構成団体になっていると言われましたけど、イメージが良く分からない。「人民の家」というのはすごく曖昧なものなのか、それとも普通の組織のように、規約みたいなものを持っていて、会員がいて、会費払ってというふうになっているのか、イメージがよくわかりません。

(松田) 「人民の家」というのは、基本的には個人加盟の一つの協同組合ないしはそれに準じた組織、ないしは相互扶助組織です。

(質問) その運営の仕方なんかは、生協法みたいなもので決められているのですか。

(松田) そう。一応原則は会員制。会費は非常に安いです。

(質問) ということは名簿があるということですね。

(松田) そうです。でもいちいちチェック出来ませんからね。いろんな人が出入りする。例えば会員であれば、会員証で映画を観る時に割引になるとか、飲んだり食べたりする時に割引になるとか、私も会員証を作ってもらいましたが、そういう事はありますよね。

(質問) やっぱり年1回総会開いてとか、法律で決まっているのですか。

(松田) それはやっぱり公的な団体ですから、それはあります。

(質問) いわゆる部外者も自由に利用することはできるわけですか。

(松田) 飲んだり食べたりすること自体はオープンです。飲食の営業許可を取っていますから。スナックを開く時はスナックの営業許可が必要だし、レストランを開く時はレストランの営業許可

## イタリア「人民の家」・グラムシ「陣地戦」について

を取りますから、部外者が行って飲食するのは自由です。

(質問) 締め出し食うこともない？

(松田) いっさいないです。それで、安いんですよ、皆ボランティアでやっているから。「人民の家」でお茶を飲んだりご飯食を食べたりするのは普通のだいたい半額なんですよ。それが人気ですね。

(質問) 実体的にもいろんな人が利用しているんですか。それともやっぱり左派的な傾向の人たちがずっと居座っているとか。

(松田) いやいや、それはないです。彼らは「アカ(左翼)の家」になるのがいちばん嫌なんです。「人民の家」なんです。だから本を作るときに困ったんです。「人民の家」がいいか、「民衆の家」がいいか、「市民の家」がいいか。イタリアで「ポポロ」というのは極めて日常的な言葉ですからね。「ポポロ」とは「市民」の集合名詞なんですよ。だから「市民の家」でもいいんですけど。「市民の家」と言っちゃうと、日本は行政の「市民の政策」だとかありますからね。最終的には「人民の家」で行こうとということ。で、「ポポロの家」にしようかとも思ったんですけどね、日本語で言うと「人民の家」というのは固いですからね。

(質問) 日本に導入された時はどなたが「人民の家」と紹介されたのですか。

(松田) 「人民の家」についての初めての本は、これですね。

(質問) 松田さんが命名されたわけですか。

(松田) 私と編集者が悩みまして、どっちにしようかということ。まだあの時代では「ポポロの家」というと、「ポポロ座」というのがあったでしょう演劇団で、「ポポロ座事件」なんていう、そういうイメージで捉えられると(笑)。いまで言うと「市民の家」か「ポポロの家」か「民衆の家」でもよかったかなと思っているんですけど。要するに、これは翻訳の問題ではなくて、実体の問題なんですね。それにふさわしい市民社会が成熟していないから、なかなか言葉が定着しないというね。いまで言えば「市民の家」でもいいかなと思っているんですけどね。中では必ず「カーサ・デル・ポポロ」と書いてるんですよ、「人民の家」にね。

(質問) ここに自分たちでビルも作ると書いているんですが、3階建てのビルとかも自分たちで作るんですか。

## イタリア「人民の家」・グラムシ「陣地戦」について

(松田) だって地域には必ず専門家がいます。皆職人さんですから、皆専門もっているわけですから、いちいち行政に頼まなくてもやれるわけですよ。ただ電気関係の工事は公的な認可を受けなくてはならないので、そういう公的認可を受けた人にやってもらう。電気、水道、ガス関係は消防法との関係があるから。それでもほとんど実費プラス若干で、もうほとんどボランティアです。だから安く出来るんです。地域で必ずいますからね。

(質問) 人件費の部分は？

(松田) ほとんどタダです。入れ替わりローテーション組んで、入れ替わり立ち代りボランティアでやる。いま日本の勤労者の年間平均労働時間が 2.000 時間くらいでしょう。イタリアやヨーロッパは 1.500 時間代になりましたからね。だから日本と 500 時間以上は違う。500 時間というと、労働日の 3 ヶ月分に近い。

(質問) ドイツより、短いんですか。

(松田) ドイツより若干短いです。いま一番短いのはフランス、ベルギー、イタリア。もう週 35 時間法ですからね。35 時間のなかに休憩時間も入りますしね。要するに彼らの言う自由時間ですよ。仕事が終わったあとどう過ごすかというときに、職場の人と赤提灯に寄って上役の悪口を言いながら酒飲むなんてね、そういうことではなくて、いろんな人と交流して映画を観たりスポーツしたりということにね。

(質問) その中でビルを建てたりってことも入っているんですね。

(松田) 入っています。市にとっても市がお金出をさなくていいから、ポローニアなんて、土地はね、無償で供与したり、めちゃくちゃ安いお金で長期に空いてるところを貸し出しするんですよ。市にとっても、積極的にそれはいいことだと。ボランティアでやってることなんですから、自分達で管理、運営もするわけですから。市の職員が常駐する必要ないんだから。だからサッカー場なんてできるわけですよ。ほとんどタダ同然で借りて。僕がフィレンツェで見たのは、市からもらったも同然だというような、めちゃくちゃ安いお金で。そりゃ市が作ろうとしたら、スポーツ施設なんてお金がかかるでしょう。「人民の家」が全部やるから、土地だけくれて。自分達で整地して、建物も建てて。これは大小問わず、アソシエーションの原則は、やっぱり勤労提供ですね。それはもう非常に長い伝統をもってるんですね。だから出発点が違う。

彼らは、もう小さい時から通っているから。つまり学校に頼らないんですよ、地域社会が大事なんですよ。そこで映画の勉強をしようとか。それで必ず「人民の家」には映画オタクみたいなのがいるんですよ。あの「ニュー・シネマ・パラダイス」ね、すごくよく出来ているでしょう、ご覧になったら、あれはまさに彼らの日常を現しているんです。大人がそういう話をしているとき、



## イタリア「人民の家」・グラムシ「陣地戦」について

まわりに必ず子どもがいるんですよ。大人がそうした話をしているのを聞いているのね。黒澤映画がどうだとか話しているのを、中身は十分には分からないけれど、大人がいきいきと面白い話をしているなど、子供が聞いているんです。

それからサッカー少年ね。サッカーはクラブ制ですから、4部、5部、6部くらいまであるんですよ、小さい子供のチームから。そういうところを「人民の家」がやっているんです。そこからプロのサッカー選手とかね、他の面でもオリンピック選手とかが出ていくし。スポーツ活動は非常に重要な自由時間ですからね。

(質問)「アカの家」ではだめなんだというふうに言うのは、やはり政党サイドから言うと、そのヘゲモニーを握ってしまおうとかいう失敗とかあったわけですか。

(松田) 政党はもうそこから出ていって自立して自分で大衆基盤持っているから、政党がいかに地域社会に貢献するかということで、その政党が「人民の家」の正式なメンバーに入る場合もあるし、メンバーには入らずに賛助団体でやっている場合もあります。政党の人間がむしろ積極的に音頭取りをしてね、社会党や共産統系列の人がね、最近ではカトリックの人たちも入っています。カトリックの人たちはまじめなんですよ。非政治的なことであれば、一生懸命やるんですよ。政治的な「人民の家」だったら参加しないけれど、地域の役にたつことなら協力してやっています。僕が知っている神父さんは、友愛とか平等なんていうのはマルクスやレーニンではなくイエスなんだと、イエスの方が古いんだって言っています(笑)。

(質問)「人民の家」を実際に運営している人たちは、何とか党の人であったり、教会の人たちであったりするのですか。

(松田) それは選挙で選ばれます。「人民の家」の会員の中から日常的にやっている人を、男性、女性、老若男女、バランスを取って選ばれます。結果的に、その人が何党に所属しているかというのは関係ないです。その「人民の家」のリーダーとしてふさわしいかどうか、そういう実績を持っているかどうかということで選ばれる。労働者もいるし、企業の社長さんとか、いろんな多様な人たちが選ばれる。要するに地域社会を活性化することが大事なんだと、その一点で結びついているんですね。だからノンポリも多いんですよ。どこにも属さないけれど、自分は「人民の家」で小さい頃から育ってきたからこれを大事にしたいと、もっと若者が参加できるようにしたいと。

彼らが警戒しているのはやはり「アカの家」になることと、「老人の家」になること、この二つ。戦後の冷戦期には「アカの家」になったケースもあるんですね。結局うまくいかない。それから、年金生活に入った老人ばかりが集まって「年寄りの家」になっちゃったら魅力ないですもんね。昔話ばかり聞かされて、「俺はパルチザンで戦った。今の若者は…」とかね、説教くさくて嫌ですよ。ね。「人民の家」の中に老人クラブは老人クラブで別にして、その人たちを中心にしたいたいよ

## イタリア「人民の家」・グラムシ「陣地戦」について

うにしてもらい、多様ないろんな層が参加できる施設にしています。

地域々々地域によって、労働者が多い地域の「人民の家」もあれば、いろいろです。大学の近くに「人民の家」があると、学生のニーズを活かそうということで、たとえば文化的な行事を大学と協力して「人民の家」で公開セミナーをやったりする。一種の生涯学習的なプログラムをつくったりしてね。必ず「人民の家」のメンバーには大学の教員なんかもいますし、いろんな分野の専門家がいますから、そういう人たちの人材活用をする。それを日本でなんとかならないだろうかと思っているんですけどね。

(質問)「地域センター」へみたい意識は、かなり出てきているんですか。

(松田)住民評議会が作られて、公的なものですが、それを支える上で自発的なものとして。実際地域に詳しいのは「人民の家」の人たちですから、「人民の家」のメンバーから地域評議会の議員が選ばれたりするんですよ。

(質問)住民評議会というのは、たとえば市議会みたいなものなんですか。

(松田)ミニ市議会ですね。

(質問)一応選挙で選ばれて。

(松田)そうです。いきなり市民参加するのはできませんですから、地域割して。

(質問)有償なんですか、その議員は。

(松田)低額ですが若干の。基本的にはボランティアに近い。

(質問)日本でそんなイメージがわくような、それに相当するような組織とかありますか。

(松田)日本でいうとどうですかねえ、区議会ですかね。区議会というのもミニ自治体ですからね。世田谷とか杉並とかで、もう区議会自体が巨大化していますが、百万近いでしょ、イタリアだけでなくいろんなところの経験を参考にして、いわゆる市民参加組織で、住民評議会的なものができています。

(質問)住民評議会というのは最近できたのですか。

(松田)法律は 1976 年です。基本法で分権法と言われている。実際にはそれ以前から住民評

## イタリア「人民の家」・グラムシ「陣地戦」について

議会的なものはやってきた。ただ基本法として法的に認可されていなかっただけの話で。イタリアの人たちの発想というのが、まず実体を作って法制化するという、最初に法律ありきじゃないんですね、まず実体を作る。まさに自治性なんですね。その公的な成果が法律。まさに実践的なヘゲモニー闘争をやるということなんです。そのための人材育成をやる。

(質問)「人民の家」というのは自主的機関ということであったとしても、数千人の規模となると、どうしてもリーダーシップが形成されていくようになるのではないですか。住民評議会自体も最終的には中央集権的な形になっていくのでは？

(松田)住民評議会はいまでは比例代表制ですから、比例代表制で選ばれますので、それぞれの政党ブロックが候補者リストを出して、大体その地域の人々の政治意識が、そのまま反映されるということです。逆に分権化の方向ですね。知識人、専門家がいますから、その地域に住んでいるそういう人たちが協力して、プレーン的な役割を果たしています。

(質問)その運営機関みたいところで運営されていく時に、市民参加型というか市民ひとり一人が意識を持って参加していくけど、でもだんだんと発展していく過程にあって、知識人とか、どこかに集約されていくとかはないのですか。代行主義が出てくるというようなことはないのですか。

(松田)彼らはその前に、その地域に住んでいる市民だから、市民であり専門家ですから、代行主義というより市民としてやっているんだという意識が非常に強いんですよ。これはまさに市民社会的な意識だと思うんですね。自分は法律家だから、自分の専門的な知識を提供するということです。だから、僕は集約されるという意味がちょっと分からないですけど。

(質問)たとえば市民の代表の顔をしたような、権限を握るような、今の政治と一緒にですね、そんなふうな形に変化していく可能性はないのですか。

(松田)それがあったら、住民投票になりますね。市民との乖離現象が起きたら住民投票なんです。だから、住民投票や国民投票の権利というのは、それは伝家の宝刀みたいなもので、それを持っていることが強みなんですよ。市民と乖離したときは住民投票やるぞと。実際イタリアで住民投票や国民投票は、回数は非常に少ないんですよ。仮に一部がリーダーを形成して強引に何かやろうとしても、住民投票やられたら潰されるわけだから、最初からやらない。だから住民投票のもつ抑制的機能、市民社会が国家や官僚や専門家の特権化を抑止する。

日本はまだそこまで行っていませんね。住民投票で決着をつけようというところまで。それを実現する方が先です。日本においては国民権制度が働かないでしまっている。部分的国

## イタリア「人民の家」・グラムシ「陣地戦」について

民主権しかないということですね。最終的に国民は決定権を持たないのですから。だからそういう意味では住民投票や国民投票の権利がきちっと確立されたとすれば、これは伝家の宝刀で、たとえば消費税なんか一方的に上げるということがあれば、国民投票にかけられれば、潰されるのは目に見えているでしょう。地方議会にせよ、国会にせよ、世論調査で国民の意思の方向と背反した場合にどういうことが起きるかということは予測できるわけですからね。これは憲法問題にしてもそうですね。国民投票かけてどっちがいいかとか。

イタリアの場合は、最近、各国の国民投票の研究が盛んになってきていまして、その抑止機能、それがあつたことの重要さが認識されてきています。つまり官僚や特権層が一方的にできないことと、あと市民が能動的に参加するというシステムの重要性。だから投票率がとても高いんですね、責任持つわけですから。このあいだの選挙で投票率が 90% 割って大問題になったんですよ。87% かな。平均して 92,3% だったんですね。これを割って、特に若い層が行かなくなって、9 割を下回ったということで大問題になった。

(質問) 日本やったら 50 %かそこら。このあいだの選挙で 4 割いってなかった。30 何パーセント。

(松田) イタリアの人に言っても信じないですよ。そんなバカなど。向こうは激しい闘いなんです。選挙権を勝ち取ったという意志が強い。それを学校で教えますからね。これは教育の課題なんですよ。国民権、普通選挙権というのは参政権のもっとも重要なことだから、まず社会科で教えるべきことなだけで。

(質問) 先日、フィレンツェでしたか、反戦 50 万人規模と言っているのがありましたね。あのあたりの大衆的な運動の広がりということと「人民の家」との関わりはあるのですか。

(松田) いま社会フォーラムがヨーロッパ全体に広がっています。直接、「人民の家」で参加するとかしないとかではなくて、それ以前に議論をする場として重要なんです。彼らは討論というのが大事なんです、好きなんです。その中で、参加しようとする人もいれば参加しない人もいます。自分はそういう意見と違うと、いろんな人が出てくる。だから「人民の家」が一つの運動として参加するわけではない。そこは交流と討論の場なんです。

(質問) 「人民の家」自身が、たとえば「人民の家」を運営している選挙で選ばれた人たちが、そういう集會に呼びかたりはしないのですか。

(松田) しないです。多元主義ですから。こういう集會があるよという宣伝をそのメンバーがすることはありますけど。それをやったら「人民の家」が「人民の家」でなくなっちゃうんですよ。そりゃ、カトリックから社会党から共産党からノンポリから、あらゆる人が参加しているわけです。

## イタリア「人民の家」・グラムシ「陣地戦」について

からね。参加できないのはネオファシスト党だけなんですよ。これだけはやはり、ファシズム経験がありますからね。

(質問) そのへん、かなりきっちり守られているわけですね、そういう原則は。

(松田) それはもう市民社会であれば、多元的な意見を尊重する。しない限り市民社会として成立しないことは当然ですからね。

(質問) 当然選挙のときに、地域の選挙でも「人民の家」が応援するとか、そういう関係は絶対にはないですね。

(松田) 「人民の家」の中でいろんな政党の代表が来て、政党討論会などはしょっちゅうやっていますよ。毎週のように週末、いろんな政党、党派の人が来て、それはイタリアだけじゃなくて外国からも呼んでね、やっています。ヨーロッパ議会選挙などもね。

(質問) 地域レベルでの政治意識を高める場として存在しているということですね。

(松田) 結果として。出発点は政治的じゃないです。政治的なものは極めて少ないです。基本は、政治的なものは個人の問題ですから。ただ、議論することによって社会的、文化的、政治的な意見を豊かにすることができます。行動は個人の判断です。だからBS放送を見ていて、BSではフィレンツェのデモのことをかなり詳しく報告したんですね、プラカードや横断幕見ていたら、労働組合はかなり広範に参加していました、いろんな産別や地域別があって、それからいろんな市民団体ですよ、そういう人たちはグループで参加している。「人民の家」でまとめて「人民の家」が旗を立てて行くというのはまったくない。フィレンツェというのは大学都市ですから、学生の参加は平和運動、特にイラク攻撃に対する反戦ね。ヨーロッパはアラブ系の人がいっぱいいますからね。イラクに対するアメリカのやり方にかなり厳しい横断幕、スローガンでしたけど。イタリア語でブッホというのは馬鹿という意味でね、「ブッシュはブッホだ」と。なかなか上手いなあと。あいつはブッホなんだと。

社会フォーラム、本当に注目ですね。政党主導型じゃないですから。まさに草の根の人たちがインターネットを活用して。固い組織じゃないですね。新しい社会運動の一つの形ですね。非常に柔軟で、固定的組織を持たないですからね。その時のその時の課題で動いて、また散って行くという。そういう意味では現代的な柔軟かい多元的な、「組織」という言葉では表せないような、非常に柔軟なやり方ですよ。EU ができたことによる効果。もう自由に行けますからね、瞬時に今度はフィレンツェで集まろうと、今度はどこそこで集まろうと。ヨーロッパも高速道路が発達しているから、車でね。

## イタリア「人民の家」・グラムシ「陣地戦」について

(質問) 国内旅行する感覚ですね。大きな国みたいな。

(松田) 向こうはドメスティック・フライトは安いですからね。もちろんヨーロッパエクスプレス(TEE)があるし。

(質問) 「人民の家」は食と絡んでいるのが強いんだと思うのですが。食堂があって皆でワイン飲んでるから強いんだと思うのですが。

(松田) それがなかったら集まりませんもんね。美味しいチーズがあって、美味しい飯が食える。これはローマ時代のことわざで、全ての真理は胃袋を通過する。

(質問) 賛成だな。

(松田) それから、ワイングラスの底には真理が住んでいる。ワインを飲まないで真理が分からない。これはいかにもイタリア人らしい。

(質問) そうかあ。じゃあそういうものがあれば、日本でもできますかね。日本ではやっぱり居酒屋なんかがある…。時間がないから、場所だけ作っても日本ではなかなかしんどいとは思いますが。注目しているところとか、そういう動きとかありますか。

(松田) 時々そういう溜まり場を作ってやりたいんだという相談は受けます。ただ僕はその前に、とにかくイタリアへ行って、まず「人民の家」の見学ツアーをおやりになってはと進めています。体験学習が一番大事ですからね。日本だって地域によって違うでしょ。たとえばボローニャ方式をそのまま日本に当てはめてもうまくはいかない。だから、何かやる前にご自身が、いろんなところを見学するのが一番大切だと思います。フランスにも、郊外の赤いベルト地帯に、「人民の家」とは名乗っていませんけど、いわゆる労働者クラブはあるんです。必ずしもイタリアだけではないんです。イタリアは有名なだけで、どこにでもあるんですよ。市民社会が発達しているというのは、市民社会がそれだけであるわけではなくて、それを支えるいろんなアソシエーションがあるんですよ。まずその実体を知ることが大切です。僕は、できればヨーロッパ全体でやりたいんだけど、やっぱりフィールドワークをやらなくてはならないので、時間的に無理なので、イタリアに限定していますけれども。できれば他のところをやる人が出てくれば、これは面白いと思います。

(質問) そのときは通訳してくれる人とか紹介してもらえますか。

(松田) イタリアで僕の留学時代の友達がおりますから。それから、今どこに行っても若い人は

## イタリア「人民の家」・グラムシ「陣地戦」について

ほとんど英語が出来ますから、英語が第二公用語的になっていますから。イタリア語ができれば一番いいのですけれど。ま、フィレンツェなんかは留学生が多いから、フィレンツェやローマは困らないけど、ポローニアとかに行きますと、日本人自身が少ないですからね。難しいのは、イタリア語が分かって「人民の家」のことをある程度分かっている人を見つけるのが難しい。僕の友人で向こうの人と結婚してイタリアに住んでいる人が、比較的このことに詳しい人で、時間が空いたときは通訳ですっとイタリアを回ってくれますけど。そのかわり、通訳が専門職ですから、向こうは結構通訳料高いですからね。だからある程度、費用がかかるのはしょうがないですね。

(質問) そういうツアーというのは、結構取り扱っているのですか。

(松田) ポローニアに3ヵ月行ったとき、ポローニアの人に聞いたら、「人民の家」を対象に来た人はいない。中心は自治体問題。ヨーロッパの自治体の中でもっともうまくいってるのはポローニアだとか、いろんな所で宣伝されて。とにかくこれは日本だけじゃなくて、世界中からポローニアに。特にパーク・アンド・ライドを最初にヨーロッパでやったのがポローニアなんですよね。あれで随分環境汚染をなくして、そういう自治体見学のついでに「人民の家」に行きたいという形でのぞくというのはあるけど、「人民の家」そのものをツアーしたというのはあまり聞いたことがないですね。やっているのかも知れませんが。

(質問) 一日、二日くらい物見遊山に行ってもなかなか把握しにくいとかあるのですか。

(松田) いや。建物に入って皆がどういう風になっているとか、何食べているのかということでもむしろ実感的に分かる面もありますね。子供たちが参加していたり、それを見るだけでも面白いですよ。どうせイタリアへ行ったら食事をしなくちゃいけないんだから、「人民の家」で食事してスパゲティでも食べて、お茶でも飲んで。確かに本格的なのだと一日、二日で無理かもしれないけれど、しかし一日、二日でも、単なる観光旅行でね、若い人たちがブランド品、グッチなどで買物するよりはもっと面白い経験だと思いますね。

できたら、行かれたらどうですか。本当に地域によって違うんですから。それを一言では言えないんです。ポローニア、フィレンツェなど主要な都市の「人民の家」の紹介をやりたいなと思ってはいるんです。ま、ポローニア、フィレンツェ、ミラノ、トリノ、ローマくらいをと思っっているんですけどね。資料は膨大に出てきています。

(質問) 僕自身は、会員制で食品の宅配をやっているところに勤めていますんで、食べ物のことをちょっとお聞きしたいと思うんですが。いま本屋さんに行っても、いろんな雑誌で紹介されたりとか、流行りみみたいな取り上げ方をされている感じなんですけど、日本でのスローフード協会の運動はどうなっているのですか。

## イタリア「人民の家」・グラムシ「陣地戦」について

(松田) 大きな流れとして、一種のビジネスチャンスと捉えてやっているグループと、そうじゃなくてライフスタイルの問題、つまり文化運動として草の根からやっているグループと、二つの流れがあって。東京でも必ずしも一本化していないって話を聞きましたよ。本来のスローフード、スローライフという方向でやっている私の友人がいるんですけど、その人の話を聞くと、そうじゃなくて、スローフードって格好いいというのでやっているのもいる。ファストフードに対して、「うちはスローフードの店です」なんて言っちゃうと格好いい。昔は「自然食です」とかね。自然食というのはもう慣れっこになってしまったから、スローフードというカタカナで言うと格好いい。

僕は今、地域のいろんな草の根の市民運動とどう結びついていくかということ、それから、やはり食文化の教育ですよね、文化として食をどう捉えるかということに関心があります。日本の場合、高度成長期に食が家庭内のプライベートな事柄になっちゃって、一番大切な食文化は公共的なものだということをおぼえてしまっている。長い伝統の食文化が消滅していくというのは、その地域社会の財産がなくなるわけですからね。そういう意味では公共性として食文化を見直そうと。

(質問) 一時期、食事は早い方がいいとか言われた。

(松田) 食事を文化、つまり交流として楽しむということがなくなった。もともと日本の中には共に食べるという共食の文化っていうのがあったんですけど。それが家庭内でも危ない、時間帯が親と子が違う。地域社会の結合も弱くなっているから共食文化というのがなくなるんですね。「同じ釜の飯を食った仲間」という言葉自体が死語になっちゃうんですね。

ご飯をゆっくり食べるというのが無駄みたいなことになって、仕事大事だ、仕事優先ということになる。ご飯をゆっくり食べながらそこでいろんな話をする、違った仕事をしている人とね。それとかは、まさしく人間発達ですね。単なる労働力の再生産だけではなくて、人間の再生産。

(質問) グラムシの読みやすい本とか、推薦の本とかありますか。

(松田) いい加減な本はいっぱい出てるんですよ、トリアッティ型のグラムシとか(笑)。やっぱりファストフード型のグラムシはいけないんで、時間かかるけど、スローフード型のグラムシ、添加物の入っていないグラムシ、本物のグラムシ、それを書くために、田畑さんたちとやっている研究会のシリーズで出す本の中の1冊として書き下ろして、今やっている。これはもう少し先になるんですけど。今までグラムシが住民投票や国民投票について言っているなんて、誰も紹介していないんですよ、アソシエーションについて早い時期から注目しているなんてね。今まで取り上げたのには全然載っていないんですよ。全部削除されています。政党論なんですよ。



作為的にそうなっているんです。だから政治っていうのは政党がやることだと思われているんですよ。違いますよね。政治とは市民社会において、市民のアソシエーションが、いろんな文化的活動の中でやっていく中にあるものですよ。一番大事なものは人間を育てること、人間発達ですよ。それから情報をお互いに共有すること。まさに情報公開ですよ。そういう知的文化的発達をやるのが人生で一番大切だ、ということをグラムシは言っているんです。

トリアッティ版ではそうではなくて、機動戦になっている。暴力革命に対して平和革命が陣地戦だみたいなね、歪めた捉え方をされてしまっているんです。そういう解説書がいっぱい出ているんです。陣地戦という言葉は、まったくそうではないんです。市民社会におけるアソシエーションをどれだけ豊かにしていくか、極端なところ言えば、政治や官僚に頼らないでも自分達でやっていける、グラムシの言葉で言うと、自己統治社会、自治社会を作っていくために、どれだけ市民社会が、つまりアソシエーションが、自治能力を持つか、これが陣地戦の根本なんです。来年早々出す本の中で、アソシエーションの中で自治体について書いているんですが、自治体をグラムシは非常に重視している。これも紹介されていないんです。

政党もまたアソシエーションなんです。政党がアソシエーション性を失うと閉鎖的になる、そういうところは全部カットしているんです。既成政党がほとんど信頼されないというのはそうでしょう。アソシエーションじゃなくなったわけですね。だから政党支持無し層が多数派になるわけですよ。この間の調査では56%が支持政党なし。市民の方が賢くなってきたわけですよ。政党が市民社会に目を向けていないから、そうなっちゃうわけですよ。本来政党というのは、まさに市民社会の中から生まれてくる、市民的アソシエーションの一形態だったわけですよ。それが対等から上下関係になってしまったわけですから、悪名高きスターリンの伝導ベルト論によって、政党が市民社会を知らないで、指導するみたいな、垂直的關係が作られたわけで。そのことによって、政党自体が自らの基盤を失ったんです、市民的基盤をね。で、衰弱する。だから、むしろそういう政党を支持したくないという感覚の方が、健全だと思うんです。政党というのはやはり、一つ形が出来ると、閉鎖社会ですからなかなか変わらないんですよ。部分的に手直しはするけど。根本的にもう一回市民社会の中に戻って、アソシエーション的な政党として、再出発しようというのは、発想がなかなか生まれてこない。

(質問)それは組織が巨大化してくるからということですか。

(松田)一つは巨大組織化することによる硬直性、ということもグラムシは言ってますよね。政党官僚制が出てくる。しかし、これを防ぐ方法はいろいろあるんですよ。政党もレフェンダムをやればいいんですよ。主権性で指導者を直接選ぶとかね。政策についても、全員投票する。イタリアの場合は左翼民主党は全員投票なんですよ、指導者を選ぶ場合はね。情報公開しますから、誰が何票、何パーセントと全部公開されるんですよ。まあ当たり前なんですけどね、こんなこと。日本はそんなことないですから、何で決まったか分からない人が、いきなり指導者になる。それは違うだろうとなるわけですね。秘密結社じゃないんだからね。グラムシは皮肉ってい

## イタリア「人民の家」・グラムシ「陣地戦」について

まず、政党という特別な団体だと自分で勝手に思い込んでいると。グラムシはかなり痛烈に批判している、一つはね、全員一致で物事が決まったとしても、それは単なる形式的なことであって墓場の静寂と同じだと言ってる。

(質問)「人民の家」の医療とかは？例えば自分達で診療所を経営するとか。

(松田) 初期に、そういうクリニックを医者が協力して作ったというのは、フィレンツェにはあるんですけど。ただイタリアは医療制度が国民皆医療制で、公的なものになっている。これまた住民評議会の管理下におかれています。基本的に医療は無料。処方箋を持っていけば薬は公定価格で非常に安い。

(質問)特にそういうところで取り組まなくても、もう全体の体制ができていますか？

(松田) まだ完璧とはいきませんが、一応そういう国民皆医療制になっている。医薬分業によって医療費の上昇を押さえている。後は老人病院みたいなのは廃止して、全部地域医療にする。お年よりは地域に戻ると元気になるんですよ。収容所に入れたらだめなんですよ。ポローニアなんかでも、それまであった老人専門病院を廃止したんですよ。全部を地域に戻したんですよ。医療ネットワークをつくり、日常的医療をやるのと専門的医療をやるのと、その間をつないでいる。カルテも全部統一化して、どこのレベルで対処したらいいかということを決めていく。診療所、クリニックで対処できることと、専門的に処することというふうに振り分ける。我々でも向こうで病気になった時は、そういうのを使えばめっちゃくちゃ安いんですよ。それから免除規定があって、今お金がないと言えば、すぐ払わなくてもいいんです。びっくりするほど安いです。同じような薬が日本の半分以上。日本が異常に、世界でも異常に高いんですよ。

(質問)するとボランティア医療というようなものはないわけですか。

(松田) それがあります。それはそれで。一つは救急を地域医療なんかでボランティアやっているのもある。まあ相談ですね、医療相談。それで、あなたはここへ行きなさいとかアドバイスする。実は医療相談は医療だけでなく、生活相談になってしまうんですよ。日常の健康についてお医者さんに話を聞いてもらうだけで安心するケースが多いんですよ、実はね。対話活動ですね。これはお年よりだけではなくて、身体障害者もそうです。いま、障害を持った人を専門施設に隔離しないで、地域社会に戻すという取り組みが行われています。これはベニスに近いトリエステというところで、最初に精神病院を廃止したんですよ。地域医療に切り替えたんですよ。地域社会の中で生活していくということに切り替えたところが、非常にいい結果を生み出している。社会復帰を早めて、もちろん医療費も安くなる。今かなり精神医療の方では注目されていて、いろんな本で紹介をされていますね。

## イタリア「人民の家」・グラムシ「陣地戦」について

(質問)日本の老人介護などでボランティア活動が今ちょっと増えてきていますが、そういう形のものもすごく発達しているんですか。

(松田)発達していますね。これは公的なものを自治体がやるのと、それからイタリアでは教会がやっている。元々は老人介護とか障害者介護を始めたのは、自治都市になってからですから、何百年の歴史を持ってますからね。だいたいキリスト教系の病院というのは、そういうことに関しては非常に力を入れている。フィレンツェなんかは公的なものと市民のボランティア的なものと、教会系のものとあるんですよ。教会系のも見せてもらったんですけど、これはなかなか設備がいいですね。信者さんがいろんなものを、お金や物を寄付するので。ちょうど僕が行ったときに、お百姓さんが野菜や果物を積んでね、ブドウなんかを積んでプレゼントに来ていましたけどね。

(質問)教会というのはいわゆるキリスト教の教会ですよ。

(松田)そうです。カトリックはかなり大きな病院を持っていますからね。医療はキリスト教の活動の重要な分野でして。医療、教育、福祉・奉仕活動。彼らは年季が入っていますからね。2000年の歴史。ただ、宗教というのは心の問題だけじゃないんですね。そういうことをやることで、現世の救済をやることで、支持者を集める。最近、来世救済はあまりみんな信じませんからね。宗教でもやはり現実のご利益のある、ご利益宗教じゃないとね。カトリックは定期的に教会に行く人はそんなに増えていないんです。だからそういう危機意識があるんでしょうけれど。ACLI(カトリック勤労者協会)とか、地域活動にはずいぶん熱心なんです。「人民の家」でもフィレンツェなんかでは、教会と「人民の家」が協力していろいろ若者の麻薬の問題やエイズの問題に取り組んだり、お年寄りの介護の問題に取り組んだり。

(質問)教会が「人民の家」になっているという所もありますか。

(松田)冷戦期に「人民の家」に対向するために、教会が「人民の家」的なものを作ったんですが、これはキリスト教民主党の出先機関で、逆に政治色が非常に強いんです。要するにアンチ左翼ですから。

(質問)自発的なものじゃないんですね。

(松田)人々が作ったわけじゃないから、結局うまくいかなかった、機能しなくて、ダメになりましたね。むしろ今はもう冷戦も終わったんだから、政治的問題は別にしてお互いに協力しようじゃないかと。ずいぶんカトリックの人たちが「人民の家」に来ていますからね。カトリックで左翼に

## イタリア「人民の家」・グラムシ「陣地戦」について

なった人もいっぱいいますしね。冷戦時代は左右対立が非常に厳しかったが、今は昔みたいではない。トリアッティは、「教会があるところには必ず『人民の家』を作れ」と言ったらしいですね。(笑)まさにコミンテルンの発想で教会が大衆的影響をもっている間は、革新的にならないんだからということだね。今は、むしろなかなかいい。特に今の法王というのは、ポーランド出身で、自分自身がいろいろ経験してきたことがあって、平和の問題なんかには非常に熱心ですから。対話を重視する人で、平和の問題に熱心ですから。教会の対応もその辺はずいぶん柔軟です。

(質問)現実的に地域の中で、「人民の家」的のなものを日本の中で作るとすれば、なかなか難しいなあと思って聞いていたんですが。

(松田)イタリアでもヨーロッパでも一朝一夕にできたわけじゃないから。今の姿を見ちゃうとね、極めて巨大化しているから難しいというふうにと感じると思うんですが、どういうプロセスで「人民の家」ができたかという、そこを考えればいいのでは。別に「人民の家」になるなら別として、どうすれば人と人とのつながりをもっといきいきしてくるんだろうとか考えれば。実は僕のゼミの卒業生で、教師をやっているのがかなりいるんですが、教育の関係は深刻ですよ。つまり、世の中高度成長のときに、地域教育や家庭教育をする余裕がなくなって、あらゆることを学校教育に押し付けたでしょ。学校任せ。学校化社会を作ったわけですよ。その矛盾が今出てきているんですよ。教師の方はそんなことまでできませんよ、となってきたわけですよ。それがゆとり教育とか変な言葉になっちゃうんですけどね。将来の子供の問題というのが心配ですから、どうつながれるのか考える。先程でできた食文化を通じてどうつながれるのかとか、お年寄りも知恵のかたまりですから、それとどうつながれるのかとかね。そういう感じで考えてみれば、いろんな目はあるんじゃないかと思います。

(質問)来やすい場を作ることだと思う。市会議員の事務所でも、クラブ・サークル的な事務所でもなんでもいいと思うんだけど。

(松田)イタリアでも、最初は溜まり場ですからね。溜まり場からスタートしたわけで。最初から「人民の家」を作ろうということではない。後から、みんなが集まってくるから名前を付けただけであって。人々が仕事を終えたあと集まってね、お茶でもいいし、お酒でもいいし、ちょっと鍋でも囲んでいろいろと、交流の場だと思うんですね。

ボローニャに行ったとき、一番古い「人民の家」を見に行ったときは、生協の事務所の片隅にコーナー作って、そこに仕事終わった人たちが集まってきて、ここぐらいの広さでね、だんだん場所が足りなくなって、継ぎ足し継ぎ足してね。だからレンガの色が違うんですよ。1階のレンガと2階のレンガの色が違ったりね。2階はまた後からレンガを買う金ためて、積み立てて、レンガ工はいるから。レンガの色がみんな違うんですよ。最初、おしゃれかなと思っていただけ、そうではなくて。

## イタリア「人民の家」・グラムシ「陣地戦」について

最初はやはり溜まり場じゃないでしょうかね。人々が自由に集まれて、いろんな話ができ、飲んだり、食ったりできますもんね。胃袋というのは意外と連帯しやすいもんですから。頭の連帯というのは、なかなかね。価値観が違うから。胃袋というのは意外と共同できやすいから、そのあたりから始めて、あとは地域の人たちのニーズですよ。こういうサバイバル時代には自分のことだけで精一杯で、人のことを考えるゆとりがなくなってきますから。私の住んでいる地域でも、ご近所と話をすると、一番大きな問題が子供の教育をどうするかということ。これはみんな深刻なんですよ。相談をどこへ持って行っていいのか分からないんですよ。学校の先生はめちゃくちゃ忙しいでしょ。

(質問) それでは、時間もかなりオーバーしてしまいましたのでこのあたりで終わりにしたいと思います。どうも長い時間ありがとうございました。